

# グローバル・サウスの新たな高揚

ビージェイ・ブラシャード

カウンター・パンチ 2024 年 1 月 26 日

聞き手 スカーレット・ベイン

## Q1 グローバル・サウスとはどういう意味か？

私が所長を務めるハバナの三大陸社会研究所（Tricontinental: Institute for Social Research）は、『ハイパー帝国主義（Hyper-Imperialism）危険な退廃的新段階』と呼ばれる研究を発表したばかりです。この研究では、グローバル・サウスとグローバル・ノースの概念について詳しく説明しています。

我々の分析によれば、北半球は少なくとも 3 つの異なる組織（G7、NATO、フォーティーン・アイズ情報ネットワーク）によって堅固に組織されたブロックとして活動しています。

一方、グローバル・サウスは、以下のようないくつかの特徴（植民地支配の歴史、植民地支配の条件）によって客観的に統合された国々の集合体として理解するのが最も適切でしょう。

その特徴とは、植民地支配の歴史、対外債務、「第三世界」論により団結してきた歴史です。

しかし、軍事的、経済的、あるいは情動的な集団形成では、必ずしも主観的な一体性を持っていない。グローバル・サウスは、ブロックというよりはむしろ集合体なのです。

## Q2 これらの国々を「南半球」にまとめるものは何か？

これらの「南半球」の国々は、先に述べたような特徴（植民地支配の歴史、債務条件、第三世界における団結の歴史）によって、外形的には団結していません。これらの要素は、新たに生まれつつある本当の団結の基盤を形成しているといえます。それは2007年の「第三次世界恐慌」の始まり、そして恐慌回復の過程で北半球の正統性が失われてきたことです、

（編集部注 = 第三次世界恐慌はリーマンショックから欧州金融危機へと続く10年間をさす）

第三次世界恐慌とその後の経済回復は、違法なイラク戦争による欧米社会の正統性の低下と同時並行で起こりました。それは、米国とフランスによる全く無意味なりビア破壊へと続きました。

ところで、この正統性の喪失は、中国の余剰資金が「一帯一路」構想を通じてアフリカ、アジア、ラテンアメリカの国々に再利用される過程と同時に起こりました。それはグローバル・サウスに新たな発展の可能性をもたらしました。

一帯一路構想は、国際通貨基金（IMF）や他の欧米の資金源とは異なり、インフラ整備を優先する投資でした。

インフラを優先するということは、先進国による外国直接投資（FDI）のように迅速なリターンを求めるのではないということです。それは「ホットマネー」による通貨の共食いではなく、長期的な発展を可能にします。

こうして北半球の正統性の喪失と、中国が世界の舞台に登場する可能性が重なり、南半球に「新しい雰囲気」が生まれました。

## Q3 グローバル・サウスの目的は何か？

今のところ、私たちが目にするのは、グローバル・サウスにおける「新しい期待」という水準です。

その主要な目的は、地域連携主義と多国間主義という2つのカテゴリーに根ざしています。そのどちらも、経済的・政治的に世界秩序を民主化したいという願望に突き動かされた概念といえます。

上海協力機構から南米共同市場（メルコスール）まで、この**地域連携主義**はすでに展開し始めています。そして現在、初期の地域連携にとどまらず現地通貨建て貿易の展開への関心がますます高まっています。この「進んだ地域連携主義」（非ドル建て経済）は、いまや部分的ながら運用可能なものとなっています。

この地域連携主義と結びついているのが、**多国間主義**という考え方の拡大です。多国間主義を一言で言うのは難しいのですが、そこには共通する信念があります。グローバル機関、たとえば国連やWTOは北半球の道具であってはならず、その運用計画はこれらの機関の全加盟国によって開発されなければならないという信念です。

言い換えれば、多国間主義の中心的な課題は、世界経済とグローバル機関の真の民主化です。

#### Q4 グローバル・サウスのダイナミズムは、既成の世界秩序を揺るがすことになるのだろうか？

実際、グローバル・サウスにおける「新しい雰囲気」、地域経済の創出、グローバル機関の多国間部門の活性化は、すでに既存の秩序を揺るがしています。

ウクライナ戦争やイスラエルによるパレスチナ人虐殺戦争に対する北からの圧力に屈しないことは、この「揺り戻し」がすでに希望的観測ではなく、現実の動きとして起きていることを示しています。

それには、最近のイスラエルを国際司法裁判所に提訴した南アフリカの役割も含まれます。

これは不可逆的なプロセスであり、北半球がこれを妨げようとするなら、その手段はもはやただ一つ、戦争しかありません。私はそう信じています。

現在、雑誌『トリコンチネンタル』が新しい研究『ハイパー帝国主義』で示しているように、NATO と同盟国の軍事費は、世界の軍事費の 4 分の 3 を占めています。

これはグロテスクな現象です。なぜなら、それはグロテスクな軍事外交、すなわち制裁と戦争の外交、協力ではなく対立の外交をもたらすからです。

### Q5 現在のさまざまな紛争を終わらせるために、グローバル・サウスが果たすべき役割はなにか？

ウクライナやパレスチナなど、現在の紛争はすべて、基本的にグローバル・ノースの傲慢さの産物です。

ドイツ再統一の際の約束にもかかわらず、NATO がロシア国境にどんどん近づいていく必要性は何だったのか。それこそが、ウクライナ戦争を生み出した核心的な理由なのです。

アパルトヘイト・イスラエルがガザ・西岸地区を占領するにあたって最も重要な支援者は誰だったのか。グローバル・ノース以外に誰がいるのか？ グローバル・ノースがガザ事態を生んだ最大の責任者だったのではないのでしょうか。

BRICS10 であれ、国連憲章を擁護する友好グループであれ、グローバル・サウスは停戦、交渉、開発を求めています。しかし北が支配するメディアは、彼らの意見をまったく報道しない。

たとえばヨーロッパでは、ウクライナでの停戦を求める声は、たとえそれがブラジルや南アフリカからのものであったとしても、「それは親ロシアの主張である」と烙印を押されてしまう。

グローバル・サウスの意見に耳を傾けず、「グローバル・サウスには独自の意見を打ち出す力がないと非難することは、NATO 諸国が受け継いできた植民地主義と人種差別主義の一部にほかなりません。

停戦を求める切実な声は、ヨーロッパやアメリカの指導者たちによって、最も傲慢な方法で退けられています。

こうしたことは、何十億という「南半球」の人々の目に、より深く、北の指導者たちの欠け落ちた正統性を投影することになるのです。

## Q6 南半球にもういちど目を向けることは欧州の利益になるのか？

欧州はもはや自分たちが世界の中心ではないということを受け入れる必要があります。

ヨーロッパは世界の人口の 10%にも満たない。それにもかかわらず、支配階級のエリートたちは、まるで自分たちが世界を動かしているかのように振る舞っています。

このような態度は人種差別的であり、植民地主義的です。

ヨーロッパの人々は、このような態度と決別し、自分たちが何十億もの人々と地球を共有していること、そして自分たちが他の誰よりも優れているわけではないという事実を受け入れる必要があります。

第三次世界恐慌が始まった数年後、欧州諸国はエネルギーの購入を通じてロシアとの統合を始めました。そして「一帯一路」を通じて中国と統合し始めました。

このことは、米国や一部の欧州諸国の支配層を悩ませました。

彼らは中国に対する新冷戦を加速させました。最初はファーウェイ絡みの嫌がらせでした。ついでロシアとの対立をあり、ウクライナでの熱い戦争へと駆り立てました。

これらの新冷戦やウクライナでの熱い戦争は、今や世界の重心となったアジアからヨーロッパを孤立させる結果となりました。その結果、インフレが進行し、好戦的な愛国論がヨーロッパ社会を包み込みました。ヨーロッパの人々にとって危険な状況が生まれています。

いまヨーロッパの人々は、自分たちの発展を地球の他の地域と結び合わせ、たがいの発展に根付かせるような新しいプロジェクトを必要としています。戦争に貴重な資源を浪費し、環境を破壊し、対立の文明へと私たちを駆り立てるのは間違っています。対立ではなく、南半球と協力することによって、世界の問題を解決するやりかたを学ぶべきです。（了）

**ビジェイ プラシャド**（Vijay Prashad）は、インド出身の歴史家、国際ジャーナリスト。グローバル・サウスや非同盟運動についての研究を多数発表。聞き手のスカーレット・ベインは、フランス共産党機関紙『ユマニテ』記者で、このインタビューは最初、同紙に掲載されました。

【翻訳チェック 鈴木頌】